



■ ごあいさつ	2
■ 企画展「埼玉生きもの情報 ～最新レッドデータブックの世界～」を終えて	3
■ 平成29年度特別展 「秩父鉍山～140種の鉍物のきらめき～」	4～5
■ 博物館でハチを観察 ～特別展に向けて奮闘中！～	6
■ ブラタモリから学ぶ ～秩父編・長瀨編に協力して～	7
■ 表紙の解説・催し物のお知らせ（10月～3月）	8

と ろ  
清

29

2017. 9

埼玉県立自然の博物館

SAITAMA MUSEUM OF NATURAL HISTORY

## ごあいさつ

木村 博昭



平成29年4月に着任しました木村でございます。よろしくをお願いいたします。

これまでほとんど勤務経験のない自然に関する職場で、

自然について理解を深めるため奮闘中の毎日ですが、実物資料などが身近にあることや当館運営にご協力をいただいている関係機関の方々からのアドバイスなどにより、本県の自然の魅力や多彩さに驚きと誇りを感じているところでございます。同時に、本県の自然の貴重な価値を多くの方々に関わりやすく展示解説する博物館の役割の重さを感じております。館運営にあたりましては、利用者の皆様の目線に立って取り組んでまいりたいと思います。

さて、当館は昭和56年11月開館以来、埼玉県唯一の自然系総合博物館として、自然及び自然と人々の暮らしとのかかわりに関する資料収集・調査研究を行うとともに、展示や教育普及活動等を通して県民の皆様へ情報提供などを行ってまいりました。こうした当館の長年に渡る資料収集活動と調査・研究活動の成果として、平成28年3月に当館所蔵のパレオパラドキシアなどの化石標本9件と秩父地域の露頭6件が国の天然記念物に指定されたところです。お陰をもちまして、昨年度の入館者数は対前年度比で30%増となりました。

今年度の事業につきましては、企画展・特別展や市町村との共催展などの展示事業、観察会・自然史講座等の体験学習などの教育普及事業を実施します。また、職員が学校や社会教育団体などに出向いて行う出前授業等も予定しております。以上の事業につきましては、例年実施しているものですが、利用者の多様なニーズにお応えできるよう、さらに内容を充実してまいりますので、ご期待いただければと思います。

また、今年度重点事業としまして、次の2点を計画しております。

まず、埼玉県では、本県においても開催される東京2020オリンピック・パラリンピック大会やラグビーワールドカップ2019の成功に向けた取組を進めていくため、「埼玉県推進基本計画」を策定しています。その中で文化の取組として、本県の歴史・文化・自然などの多種多様な文化資源の魅力の世界に発信することとしています。このため、当館では国指定天然記念物など当館の魅力を高め、積極的に情報発信し、県内のみならず、県外・海外からも「人を呼べる博物館」を目指しているところです。内容としましては、国指定天然記念物及びジオパーク秩父コーナーの展示改修、より多くの入館者を呼び込むための案内看板設置、グローバル化に対応した情報発信のため多言語化などによるホームページデザインの一新を予定しております。

次に、昨年3月に国指定となりました天然記念物の保存活用計画につきましては、国指定された天然記念物を後世に伝えていくため、県と関係市町村が保存活用計画策定委員会を設置して、保存・活用・整備等のあり方を検討し、今後3年間で策定する予定です。策定にあたっては、保存活用計画策定委員や地元関係者・関係機関の方々からご意見をいただきながら、学術面、教育普及や地域振興に役立つものとなるよう検討してまいりたいと考えております。

今年度は秩父・長瀬の観光地としての魅力が各種メディアで取り上げられる機会も多く、その影響もあろうかと思いますが、当館でも多くの方々にご来館をいただいております。当館といたしましても、「太古の昔、秩父には海が広がっていた」「世界で9体しか発見されていないパレオパラドキシアの全身骨格標本のうち2体が埼玉県(当館)で見られる」「長瀬は日本地質学発祥の地」など、多くの方々に本県の自然の魅力や多彩さを改めて知っていただくため、わかりやすく楽しく学べる展示の工夫や博物館クイズなどをご用意して、皆様のご来館をお待ちしております。

(きむら ひろあき・館長)

## 企画展「埼玉生きもの情報 ～最新レッドデータブックの世界～」を終えて

木山 加奈子

### はじめに

今年の夏は、レッドデータブックの企画展を開催しました。なかなか目にするのできない「希少な生きもの」を展示するだけでなく、こうした生きものをとりまく状況が変化していることや、それを把握するために日々の調査が大切だということも盛り込みました。

### 1. レッドデータブックってなんだろう？

レッドデータブック（以下：RDB）とは、絶滅のおそれのある生きものの現状について解説した本です。種ごとに現状を評価し、ランク付けしていることが特徴です。本を開くと、それぞれの生きものがどんな場所にいらして、どのような要因で減ってしまったのかが解説されています。

日本では1991年に初めてのRDBが出版され、その後、自治体レベルでも数多く作られました。埼玉県では、1996年に動物編、1998年に植物編がそれぞれ初めて出版され、現在までに2度改訂されてきました。

### 2. 埼玉で絶滅した生きもの

本展の目玉として、絶滅してしまった生きものの標本を数多く展示しました。博物館の裏側には、何十年も前の、様々な生きものの標本がたくさん収蔵されています。中には、現在は絶滅してしまった生きものも含まれています。その中から、オオイチモンジ、ハッチョウトンボなどの昆虫や、アツモリソウ、カキランなどの植物を中心に紹介しました。



アツモリソウの標本

ちなみに、展示した標本のほとんどは、県内で採取されたものです。こうした標本が、かつて埼玉にその生きものが生きていた確かな証拠になるのです。

### 3. 埼玉で減っている生きもの

ひとくちに「絶滅のおそれがある」といっても、置かれている状況は種によって様々です。今回は以下の2つに分けて紹介しました。

#### ①限られた環境にくらす生きもの

絶滅のおそれのある生きものと聞いてまず思い浮かぶのは、山奥にひっそりくらすものや、ここにしかない！というものではないでしょうか。

埼玉では、主に県の面積のわずか2%しかない亜高山帯や、資源としても有用なため開発の危機にさらされている石灰岩地の生きものが該当します。亜高山帯のものは県で絶滅危惧種になっていても国レベルではランクがないものも多く、一方、石灰岩地の植物は、国レベルでも高いランクがついているものが多いです。こうして国と県のランクを比較してみると、日本における埼玉の自然の特徴も垣間見えてきます。

#### ②環境の変化で減った生きもの

RDBには、かつてはどこでも見られたような生きものが意外と数多く載っています。秋の七草で有名なキキョウやオミナエシ、埼玉県の花サクラソウなどの湿地の植物、水田で見られたタガメやゲンゴロウなど、みなさんもよく知っている生きものが、生活の変化や開発で続々と絶滅危惧種になっているのです。また、植物の場合は、近年秩父地域で急増しているニホンジカによる食害や、園芸目的の採取などもあります。生きものを脅かす要因は様々で、多くはこれらが組み合わさってダメージを与えています。

### 4. RDBは生きている

生きものを取り巻く状況は日々刻々と変化します。ですから、それを把握するためには日々の地道な調査が大切です。調査を続けていると、絶滅したと思われていたものが見つかったり、新たに県内での生息が確認されたりすることがあります。日々調査を続けていらっしゃる方々とともに、博物館でも、埼玉の自然を調査し続けます！

(きやま かなこ・学芸員)

# 特別展 秩父鉱山

## 140種の鉱物のきらめき

会期 平成29年9月23日(土)～平成30年1月14日(日)

井上 素子・小林まさ代

### 秩父鉱山ことはじめ

秩父鉱山は、埼玉県秩父市の西方、中津川上流に位置する鉱山で、かつては関東有数の金属鉱山でした。現在も結晶質石灰岩(大理石)を採掘している稼行中の鉱山です。地下深くから貫入してきたマグマが、主に石灰岩に接触することによって形成されたスカルン鉱床であり、その中でも秩父鉱山は、金・鉄・銅・鉛・亜鉛など多種の金属鉱石を産出するという珍しいタイプの鉱床として知られています。また、約140種にも及ぶ多種多様な鉱物や結晶形の整った鉱物が産出することから、鉱物学的にも注目されています。

しかし、昭和48年に金属鉱石の採掘を終了してからは、良質な鉱物の収集が難しくなり、当館に既存する標本も必ずしも十分とはいえませんでした。また、当時の鉱山を知る方も少なくなってきました。そこで、当館では3年前から積極的に秩父鉱山産の鉱物を収集し、同時に失われつつある当時の暮らしのようす、写真などの記録も収集してきました。本展示では、その成果を元に、秩父鉱山の鉱床、鉱物、歴史、暮らしについて、その全貌を御紹介いたします。

### 第1章 鉱床

秩父鉱山は、スカルン鉱床の中でも、産出する金属鉱石の種類が多いことで知られています。そのため、日本のスカルン鉱床を精査して分類した宮沢俊弥東京教育大学名誉教授は、秩父鉱山を独立した「秩父型」と分類しました。また、秩父鉱山の鉱床は、早期鉱床と後期鉱床に分けることができます。早期鉱床は火成岩の近傍に形成し、石灰岩を交代したスカルンで構成されており、鉄・銅・鉛・亜鉛などの金属鉱物が塊状になっています。一方、後期鉱床は、主に石灰岩中に脈状・煙突状・レンズ状などの形をしており、鉛・亜鉛・マンガンなどの鉱石鉱物が濃集しています。このような2つのタイプの鉱床が存在する理由



**車骨鉱** 車軸のような形が特徴の鉱物。秩父鉱山の車骨鉱は結晶形が大きく美しい。

は、早期のスカルン型鉱床が形成されたのちにも熱水活動が継続し、比較的低温の熱水によって後期鉱床が形成されたためと考えられています。

展示解説書には、宮沢教授とも親交が深かった鉱床学者島崎英彦東京大学名誉教授に御寄稿いただいています。秩父鉱山の鉱床学的な位置づけを知りたい方はぜひ御一読ください。

### 第2章 鉱物

秩父鉱山から産出する有名な鉱物の中でよく知られるのは、糸状の自然金や車骨鉱・ブーランジェ鉱などです。美しく大きな結晶が産出することが特徴で、1つの鉱山から非常に多くの種類の鉱物が産出することでも注目されています。そこで、国立科学博物館名誉館員・名誉研究員、松原聰氏に、秩父鉱山産鉱物のリストアップを依頼したところ、140種を超える鉱物が報告されていることが明らかになりました。

そこで本展示では、できる限り多くの種類の鉱物を展示すべく、松原氏をはじめ、鉱物収集家や地元の方々に御協力いただきました。その結果、100種類を超える鉱物を揃えることができました。これほど多種類の秩父鉱山産鉱物が一堂に会することはありません。ぜひ御覧ください。

### 第3章 歴史

秩父鉱山採掘の歴史は中世にさかのぼるとい  
う伝承がありますが、明確に史料に登場するのは、  
江戸時代慶長13(1608)年～14年、中津川集落  
付近の「桃の久保」における金の採掘です。この  
時大量に金が産出したことから、以来、多くの  
人が一攫千金を夢見て入山してきました。江戸の  
天才発明家平賀源内もその一人です。本展示では  
秩父市在住の源内研究家、井上研史氏に御協力  
いただき、源内が秩父鉱山に残した足取りにス  
ポットをあててご紹介します。

さて、江戸時代後期になると、秩父鉱山では  
銀や鉛も採掘するようになりました。また、明  
治時代には、大戦による鉄需要の高まりをうけ  
て興隆します。このように、多種の金属鉱石を  
産出する秩父鉱山は、時勢に合わせて採掘対  
象を変えることができるという強みがありました。

昭和12年、日室鉱業株式会社が秩父鉱山の  
経営に乗り出し、近代的な設備を充実させて、  
鉄・銅・鉛・亜鉛などの多種類の鉱石を出荷  
するようになります。その最盛期は、昭和38  
年頃～昭和43年頃でした。そして、輸入  
鉱石に押される形で、金属鉱石の採掘をやめ  
た今も、結晶質石灰岩を出荷しています。

### 第4章 暮らし

秩父鉱山の鉱山町は、昭和30年代から40  
年代半ばまで活況を呈し、最盛期の昭和41  
年には従業員約800人、全人口2400人  
が暮らしていました。町には集会所・郵便局  
・診療所(歯科・内科・外科)・小中  
学校・保育園・駐在所がありました。食料  
や生活必需品は索道で運ばれ、生鮮食品  
も充実していました。

隔離された鉱山町において娯楽の確保は  
重要な課題であり、会社も力をいれていま  
した。集会所では毎日曜日に無料映画が  
上映され、年に1度盛大に行われた「山  
神祭」では、東京から芸能人を招いての  
歌謡ショーが開催されたため、秩父市  
内からも多くの人々が駆け付けたとい  
います。

本展示では、当館が収集した写真に加え、  
秩父鉱山で暮らした人々を丹念に取材し、  
『写真と証言でよみがえる秩父鉱山』を  
執筆した黒沢和義氏の原画も展示しま  
す。厳しくも華やかな一面をもちあ  
わせた秩父鉱山の暮らしを御覧ください。

最後に、この展示を通じて、マグマと石  
灰岩の出会いによって金属鉱床ができ、  
それをめぐってさまざまな人の喜怒哀  
楽があったことを知っていただければ  
幸いです。

(いのうえ もとこ 主任学芸員  
こばやし まさよ 学芸員)

#### 特別公開 平賀源内がつくった石綿製「火浣布」

源内が秩父鉱山をはじめて訪れたのは、火浣布(燃えない布)の原料となる石綿を求めてでした。源内が織ったと伝わる火浣布のうち現存するのは2つのみで、1つは京都大学附属図書館、もう1つは早稲田大学図書館が所蔵しています。本展示ではこの2つの火浣布を期間限定で公開します。

石綿には蛇紋石族に属するクリソタイルと、角閃石族に属する直閃石、透閃石、緑閃石などがあります。京都大学附属図書館所蔵の火浣布は、クリソタイルであると考えられます。これは、長瀨を中心とする三波川帯中の蛇紋岩から産出します。一方、早稲田大学図書館所蔵の火浣布は国立科学博物館によって緑閃石であることがわかっていました。

今まで秩父鉱山産の石綿の存在はあまり知られておらず、源内が両神山中で石綿を発見したというのは誤りと考えられてきました。しかし、本企画展に合わせて寄贈いただいた秩父鉱山産鉱物の中に石綿が含まれていました。そこで、国立科学博物館に分析を依頼した結果、早稲田大学所蔵火浣布の原料と同じ緑閃石であることが明らかになりました。確かに源内は、秩父鉱山で石綿を採取し、火浣布を織っていたのです。



**火浣布隔火** 平賀源内作  
京都大学附属図書館蔵  
2.1 × 2.1cm



**クリソタイル**  
皆野町金崎産  
写真直径約6cm



**火浣布** 平賀源内作  
早稲田大学図書館蔵  
10.2 × 9.0cm



**緑閃石**  
秩父鉱山産  
写真直径約4cm

## 博物館でハチを観察 ～特別展に向けて奮闘中！～

半田 宏伸

### はじめに

自然の博物館の企画展示室では年間2回の展示替えを行い、合計3つのテーマの異なる展示を行っています。そのうちの1回は特別展として、展示図録も作成しています。

来年度(平成30年度)の特別展は、夏季に「ハチ展」が予定されています。正式なタイトルは未定ですが、ハチの種の豊富さや暮らしの多様さ、面白さについて、皆様に知っていただけるような展示にしていきたいと考えています。

そこで今年度は、展示に向けて様々なハチ関係の資料を収集しています。ハチの資料収集といえ、もちろん採集して標本をつくるということも大切なのですが、写真資料もハチの面白い生態を紹介するために欠かせません。そのため、県内を中心にハチの写真を撮りつつ、実物も採る日々を送っています。

今回はその活動の中でも、写真資料を集める過程で、博物館の敷地内で観察したハチたちについてご紹介します。

### 博物館の壁のハチ

博物館の外壁には、様々なハチが飛んできます。このハチたちは何をしているのでしょうか？

ハチの仲間には、木の表面などに開いた穴に巣を作る種類があります。既に開いている穴を利用するハチを借孔性のハチと言います。博物館の壁面には小さな穴がたくさん開いており、ハチたちは、この壁の穴の中に巣を作りに来ているのです。飛んでくるハチには、ドロバチの仲間やジガバチモドキの仲間が見られます。さらに、これらのハチに寄生するセイボウという寄生蜂の仲間もやってきます。セイボウは「青蜂」と書き、全身が青色や緑色をした金属光沢で包まれたハチです。非常に美しい昆虫なのですが、1cm未満の種類が多く、素早いので見つけるにはコツがいります。加えて、日差しの強い晴れた日の、日当たりのよい場所に飛んでくるため、写真撮影は一苦労です。



日差しの強い中で、壁に来るハチを待つ(左)  
穴の様子を伺うエゾジガバチモドキ(右)

### 竹筒にやってくるハチ

竹を束ねて吊るす竹筒トラップという方法を使うと、借孔性のハチが巣を作る様子を観察することができます。竹を20cm程度に切りわけまとめて、軒先などに設置することで、筒の中にハチが巣を作りに来てくれるのです。巣の前で待っていれば、ハチが巣にエサや巣の材料となるものを運び込む姿が観察できます。



敷地に設置した竹筒



巣材に葉を運びこむバラハキリバチ(左)  
巣材に泥を運び込むオオフトアオビドロバチ(右)

### おわりに

来年度の特別展では、こうしたハチたちの多様な生態写真に加え、たくさんの実物標本を展示していきます。中には、普段近寄ることのできないハチの巣の実物や、宝石のように輝くハチ、体長わずか数mmの小さなハチなど、普段目にするることのないような様々なハチの一面を紹介していきたいと考えています。ご興味のある方は是非ご来館ください。

(はんだ ひろのぶ・学芸員)

## ブラタモリから学ぶ ～秩父編・長瀨編に協力して～

主任学芸員 井上 素子

NHKの番組「ブラタモリ」をご存知でしょうか？タモリさんが全国各地を“ブラブラ”歩いて、時に地形や地質を紐解きながら、その町の歴史や文化の痕跡を発見していく番組です。高視聴率を維持するとともに、地理学や地質学の専門家が熱い視線を送っています。難解で敬遠されがちな地質現象について、地質学的な知識を持たない人さえ楽しませる力をもつ番組だからです。この6月にはブラタモリ制作チームが、日本地質学会の表彰を受けています。

この度、7月15日に秩父編が、8月19日に長瀨編が放映されました。当館は、地質分野の学芸員が中心となり、ネタの提供、現地の案内、専門家や郷土史家の紹介、シナリオの地形学・地質学的な検証などについて協力しました。「専門的な内容をいかにわかりやすく伝えるか」は、学芸員が日々試行錯誤していることです。今回、番組制作に協力する過程で多くのことを学びました。

### 妥協なき取材・徹底的に現場で議論

ディレクターは、あらゆる専門家を取材し、多方面からネタを集めてられました。そして共に出演した産業技術総合研究所の地質学者、高橋雅紀氏とともに、何度も現地を歩いて検証しました。目の前の風景に対して素朴な疑問をぶつけるディレクターと、ずば抜けた地質センス（御本人によると「妄想力」）を持つ高橋氏と、現地で議論していただくことは、本当に勉強になりました。分かっているつもりになっていることもたくさんありました。例えば、岩畳に走る碁盤の目状の節理の成因は、改めて調べると、構造地質学の研究が盛んな長瀨においてもきちんと研究されていませんでした。これについては、早稲田大学の高木秀雄教授にも岩畳に足を運んでいただき、先生の見解をご教示いただきました。座学ではなくフィールドで議論することの大切さを再認識しました。

### ストーリーを重視・正確さよりシンプルさ

秩父も長瀨も、地形・地質とくらしを結びつけ

る話題はとて豊富にあります。それをどうまとめるかがディレクターの腕のみせどころです。「秩父がず～っと日本を盛り上げた」という切り口には脱帽でした。そして「ストーリーに関係ないことは容赦なく切る！説明も、極限までシンプルに！」という姿勢は、大変勉強になりました。専門家も見ているブラタモリ。学芸員としては、つい「正確さ」に固執してわかりにくくしてしまいがちです。武甲山の石灰岩を「サンゴ礁」と言い切るのも、本当は勇気のいることなのです。

### 本番に臨んで

いざ撮影に臨むと、本当にぶっつけ本番であることに驚きました。タモリさんはシナリオを全く知らずに収録。「はじめまして」とあいさつする時が本当に初対面で、収録中以外、話はできません。タモリさんは想像をはるかに超えて地質学の素養があり、とても動揺しました。知識なら勉強できるのですが、岩石を同定する（種類を見分ける）ことは、経験を積まなければできません。長瀨編では、タモリさんはいきなり荒川の河原の石の観察をはじめて次々と名前を言い当て、当館の岩石園では、ほとんどの岩石をひとつひとつ見ていかれました。タモリさんと石についてあれこれ話すのは、とても楽しく、本当は詳しく説明しなかったのですが、こちらは案内人として番組の構成どおり進行しなければならず、辛いところでした。収録後、「面白かったです。この博物館は一度見たかったんですよ。改めて中も見させていただけます。」と仰っていただきました。

### 秩父・長瀨の魅力を再認識

今回は、本来1本だった秩父編を、内容が豊富ということで2本にさせていただきました。そしてタモリさんに楽しんでいただいたことで、もっと多くの人に地質学の面白さを伝えられるという博物館の可能性も感じる事ができました。タモリさん、スタッフのみなさんありがとうございました。

(いのうえ もとこ・主任学芸員)

表紙の解説

「秩父鉱山の自然金」



自然金（化学組成 Au）は、天然に産出する金の鉱物です。金は、硫黄や酸素といった他の元素と化合しないため、自然金は自然界で唯一の金を含む鉱物です。

自然金は、火成活動に伴う熱水によって、鉱床にもたらされます。もっとも一般的な産状は、石英脈中に他の金属硫化鉱物と共に微粒子として産出することです。鉄や銅の鉱物は、数 cm 大の結晶に成長することもあります。金は鉱石中の含有量が低いこともあり、肉眼で見られることは皆無です。稀に肉眼サイズの結晶が形成する

こともあります。ピラミッド形の八面体結晶や、樹枝状結晶が基本の形です。砂金は、鉱床中の金が洗い流され、川底などに溜まったものです。

秩父鉱山大黒鉱床の自然金は、閃亜鉛鉱に伴い細長い糸状に産出します。長さ 10cm に達するものもあり、「糸金」や「ひげ金」と呼ばれました。このような自然金は、一般的な金鉱床での産状とは異なり、世界的にも珍しい物です。なぜ糸状になるのかは、まだよく分かっていないようです。

鉱石中から特定の金属成分を取り出す製錬が不要で、指でもつまめる糸金は、換金性が高く、秩父鉱山の中でも重要視されていました。鉱山で働いていた方の話では、糸金の晶洞を掘り当てると、盗難防止のために周辺を「おぼけが出た」と言って閉鎖し、厳重な管理のもとに掘り出していたそうです。

写真撮影：持田 光明（当館資料整理ボランティア） 解説：小林 まさ代

催し物のお知らせ（10月～3月）

展 示

	タイトル	期 間	内 容
特別展示	秩父鉱山～140種の鉱物のきらめき～	9月23日（土）～1月14日（日）	140種にも及ぶ多種多様な鉱物や中世こさかのぼる採鉱の歴史、華やかだった鉱山町の歴史などを紹介。
企画展示	縄文有用植物展～クリ植えマメ播きウルシを掻いた？！～	2月3日（土）～6月中旬	狩猟採集のイメージが強い縄文時代の人々が、積極的に育て利用していた役に立つ植物について紹介。
季節展示	秩父鉱山～鉱山町の輝き～	9月12日（火）～1月14日（日）	意外に華やかだった当時の暮らしを写真で振り返る。
	埼玉の天然記念物	1月30日（火）～6月中旬	埼玉県にある国指定天然記念物を中心に紹介。

開館時間 9：00～16：30 休館日：月曜日※祝日、振替休日は開館、12/29～1/3、1/15～1/29

イ ベ ント

	タイトル	日 時	場 所	参加費	対象・定員など
観察会	地学散歩 in 秩父華厳の滝	3月10日（土） 10：45～15：15	秩父華厳の滝 （皆野町）	300円	小学生以上 30名
	黒浜貝塚 縄文の森とハンノキ林	3月17日（土） 13：00～16：00	蓮田市文化財展示館	300円	小学生以上 30名
自然史講座	葉っぱでつくるカエデ図鑑	11月18日（土） 10：00～12：00	博物館 科学教室	500円	小学生以上 30名
	鉱物図鑑づくり（秩父鉱山編）	12月2日（土） 10：00～15：00	博物館 科学教室	500円	小学生以上 30名
	顕微鏡で観察！キラリ砂粒	1月13日（土） 10：00～12：00	博物館 科学教室	300円	小学生以上 24名
	ヘンテコ生きもの 土壌生物を見よう	2月17日（土） 13：30～16：00	博物館 科学教室	300円	小学生以上 30名
	縄文クッキーをつくろう	2月24日（土） 10：00～12：00	博物館 科学教室	500円	小学生以上 30名
その他のイベント	県民の日 記念イベント	11月14日（火） 9：00～16：00	博物館 科学教室等	無料	どなたでも
	紅葉ライトアップ	11月11日（土）～26日（日） 17：00～21：00	博物館 カエデの森	無料	どなたでも
	自然の博物館研究発表会	12月9日（土） 10：00～15：30	東松山市民活動センター	無料	どなたでも

※ 観察会、自然史講座は事前に申し込みが必要です。詳しくはお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

埼玉県立自然の博物館ニュースレター 澁 第29号 平成29年9月29日 発行

編集発行 埼玉県立自然の博物館 〒369-1305 埼玉県秩父郡長瀬町長瀬 1417-1

TEL 0494-66-0404（総務担当） 0407（学芸担当） FAX 0494-69-1002

URL <http://www.shizen.spec.ed.jp/> E-mail [t660404@pref.saitama.lg.jp](mailto:t660404@pref.saitama.lg.jp)



埼玉県のマスコット「コンボン」